

奥羽大学報



目 次

平成18年度卒業証書学位記(学士・博士)授与式……	2
奥羽大学文学部廃止……	4
博士(歯学)学位記授与／記念植樹／謝恩会……	5
共用試験歯学系 CBT、OSCE 特別実施／共用試験歯学系 CBT、OSCE 受験者を引率して ……	6
第11回歯学部教員研修講習会／第10回奥羽大学歯学部歯科医学教育者ワークショップ／薬学部公開セミナー……	7
第2回大学院教員研修セミナー／(歯)JICA 青年海外協力隊研修生受け入れ……	8
国際歯科研究学会(IADR)ハットン賞選考会出場と IADR／Unilever Travel Award 受賞／文学部卒業生へのお知らせ ……	9
父兄会……	10
附属病院……	11
私が薦める一冊の本……	12
余滴／同窓会……	13
同窓生のひろば……	14
退職によせて……	15
人事／慶弔……	22
行事予定……	23
平成19年度教務日程(歯・薬) ……	別刷
平成19年度授業時間割(歯・薬) ……	別刷

平成18年度

卒業証書学位記(学士・博士)授与式

平成18年度卒業証書・学位記授与式は、3月9日(金)午後1時から記念講堂において行われ、歯学部100名、文学部45名に卒業証書と学位記が、また大学院修了者3名及び論文提出者4名に博士(歯学)の学位記が授与された。

式は多数の来賓の方々のご臨席のもと、ご父兄、教職員等が参列し挙行された。

理事長祝辞、学長告辞に続き、卒業生を代表して歯学部竹内晶子さんが答辞を述べた。

さらに成績優秀者賞授与が行われ、最後はひとりひとりに卒業証書と学位記が手渡された。卒業生は感激の中、学び舎をあとにした。

各賞の受賞者は次のとおり。

晴 川 賞	歯学部	竹内 晶子
優 等 賞	歯学部	黒田 暢
		豊原 大業
		平山 圭史



告 辞

学 長 清 水 秋 雄

本日、ここに奥羽大学平成18年度卒業証書ならびに学位記授与式を執り行うに当たり、ご来賓の晴川学舎理事長影山英之先生はじめ役員各位、また多くの関係の方々のご臨席を賜り、誠に感謝に耐えません。厚く御礼申し上げます。

歯学部、文学部卒業生諸君、卒業おめでとう。所定の期間、厳しい学業の研鑽を積み、晴れてこの日を迎え、有為な社会人としての巣立ちに、多大なる敬意を表します。

特に、文学部は、本年度をもって18年間の歴史に幕を閉じることになりました。大学行事には歯学部・文学部・薬学部の3学部が揃い、緊密な連携の下、活発に活動してまいりました。教育環境の激変によるとはいえ、その一つが失われることは、誠に残念であります。本日、文学部を卒業する諸君は、各自の努力に加え、熱意ある教職員とともに勉学に勤しみ、全員揃って卒業の栄冠を得ることができました。その成果は、必ずや社会に貢献するものと信じて止みません。文学部の先生方、かような状況下にあいながらも、熱心な教育指導に従事されましたことに感謝いたします。

さて、諸君が仲間入りする社会は、過去に異常な経済成長やその反動である低迷期を経験し、現在安定期に差し掛かっているところでもあります。その変化に伴う傾向として物質文明の発達が急速に加速し、一方社会生活の心の支えとなる精神文化への関心が希薄になったように受け止められます。そこには古くて新しい問題、過去に経験したことがない多様性を帯びた問題が発生しています。特に、文明先進国にありがちな、社会経済に影響の著しい人口問題、変貌している人生観、生活環境、等々単なる政策のみでは解決し得ない課題が山積しています。

かような移り変わりの激しい社会で生じる諸現象は、従来型の経験則には当てはまらない事例がしばしばあります。その解決の糸口

祝 辞

理事長 影山 英之

になるのが、社会、個々人の創造的能力を背景にした知恵と実行力であります。それにより多様なチャンスを見出し、また新しい時代の方向性を模索する好機にもなります。

諸君が、社会において自己を実現するためには、学識はもちろん、豊かな人間性に裏打ちされたコミュニケーション力を駆使し、良好な人間関係を構築する素養を持ち合わせていなければなりません。これは奥羽大学が開学以来、一貫して謳っている建学の理念「人間性豊かな有為な人材の育成」に通じるところであります。諸君には、緑豊かな環境下での授業、また教職員や学友、課外活動など学習体験の場において、基本的素養が培われ、育まれているものと信じています。

しかし、学園と社会における人間関係の厳しさには、大きな乖離が存在しています。学園では、教職員、友人など限られた人達との交流が主で、多少の失態があっても、許容されていましたが、社会ではこの許容範囲は極めて狭まっています。この現実をわきまえ、生涯を通じ、さらなる質の高い人間力の向上が図られることを期待しています。

終わりに、諸君が健康で、豊かな人間性をもって、遺憾なく能力を発揮され、社会に貢献されるよう、またご臨席の皆様のみますすのご健勝を祈念し告辞といたします。

卒業証書と学位記を手になれます皆さんと御臨席なされましたご父兄各位にとりまして、本日は“無上の喜び”と拝察いたし、心よりお祝いを申し上げます。

本日はまことにおめでとうございませう。

卒業されます皆さんにとって、今日までの長い間には多くの人と出会い、沢山の経験をなされたことと思います。限られた時間では到底語り尽くせぬ程の数多の経験は、「思い出」という一括りの言葉にとどまることはなく、必ずや皆さんの人生に豊かな実りを齎す、良質な肥料となってくれることを信じております。

とりわけ最後の学生生活である奥羽大学で、皆さんが「物事の本質を捉える大切さ」を学んで行ってくれば、私共にとってこれ以上の喜びはありません。

これから後、皆さんが常に良識と善意を備え、それぞれのよるべき職業を通して、地域社会に貢献なされますことを希ってやみません。そして、争いのない明るい平和な世界の実現に寄与してくれることを望んでおります。

何事も一朝一夕に出来ることばかりではありませんが、困難が全てではありません。今、自分の前になすべきことがあれば、できぬ心配をするよりは、できたときの喜びを心に描いてやってみる事です。失敗は成功の母、何度でも立ち直る努力を厭わなければ挫けることは恥にはなりません。

今日の仕事を明日に延ばさず、今日の仕事としてやり遂げる事です。一日一日実行することです。それを繰り返し、積み重ねていく先に更なる可能性が生まれ、目標は達成されます。

皆さんは若い。精一杯頑張ってください。期待しております。

結びにあたり、卒業生の皆さんに喝采を贈ると共に、御臨席の皆様御健勝を祈念致しまして、私の祝辞と致します。



答 辞

卒業生代表 竹 内 晶 子

本日は、私達のために、このような盛大な卒業式を催していただき、誠にありがとうございます。ここに僭越ではございますが、卒業生を代表いたしまして一言御礼を申し上げます。

只今、理事長先生、学長先生をはじめ、御来賓の皆様から激励のお言葉を賜り、卒業生一同、感激を新たにしております。

私達は、今日をもちまして、長かった学生生活に終止符を打つこととなりました。思い返せば、入学当初は慣れない土地での新生活に、不安や戸惑いを覚える日々の連続でした。しかし、新しい友人たちと次第に親しくなり、心を通わせていくことで、充実した毎日へと変わってゆきました。

また、諸先生方には、時に優しく、時に厳しく、私達を指導して頂きました。将来への希望と前進する勇気を与えて下さったのは、先生方でありました。

そして、多くの心配をかけたにもかかわらず、いつも温かく見守り、支え続けてくれた家族にも心より感謝しております。多くの方々の力添えをいただけたからこそ、私達は今日、晴れてこの式に立つことができました。

私達は今、ひとり社会へと旅立とうとしています。まだ見ぬ社会は、今の私たちにとって厳しいものでありましょう。しかし、たとえどんな困難に直面しようとも、自分の将来を見つめ、自らの可能性を信じ、立ち向かってゆく所存であります。学生生活で身につけたものを活かし、少しでも多くの人の支えとなり、社会に貢献できる人間になれるよう、今後も努力を重ねてゆきたいと思います。

本日までご指導くださいました諸先生方や大学関係者の皆様方に、心より御礼申し上げますと共に、今後も変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。

最後となりましたが、諸先生方や御来賓の皆様方の今後のより一層のご健勝と、奥羽大学のますますのご発展を、心より祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。

奥羽大学文学部廃止

私が文学部長に任命された平成14年4月には、すでに文学部志願者数の減少が顕著になり、学部内では趨勢挽回の方策として、学部改組やカリキュラム改善の動きが進行していました。しかし、急速な志望者激減に歯止めがかからず、平成15年8月には残念ながら次年度の学生募集停止が決まりました。

この決定と同時に、文学部はいくつかの難題を抱えることになりました。1つは、学部を閉じる予定の平成19年3月までに、在学生在が全員無事に卒業できるかということ、2つ目は、同じく閉幕までの3年余の間に、諸先生にご自身の転身の道を見つけていただくこと、3つ目には、先生方が数多く転出した場合、その後の教育体制をどのようにして維持するかなどです。

学部としては在学生の4年間での卒業を最重点課題にして取り組みました。常勤の先生はもとより、非常勤の先生方の協力をも得て、教科面ではきめ細かな個別指導や特別指導で学力の補強と増進を図り、生活指導の面では、過度の欠席のために定期試験の受験資格を失って卒業必要単位未修得という事態にならぬよう、教員一同協力して指導・警告を行いました。また、時には学長先生のお力添えも頂きました。その結果、学生諸君も自分の置かれている状況を理解し、最後には踏ん張りを見せてくれて、出席状況も改善し、全員が試験にパスして無事に卒業の資格を得ました。まことにご同慶の至りです。(ただし、辛いことですが、先生たちの中にはまだ新たな勤め先が決まらない方々もおられます。)

ともあれ、文学部はこの3月で18年間の幕を閉じます。その意味では、与えられたこの拙文の表題通り「文学部廃止」ということになりますが、これですべてが終わりというのではなく、大学としては4,000余名の文学部卒業生を抱えているわけですから、どうぞこれらの同窓生に対して、末長いご配慮をお願いする次第です。

(文学部長 青木 義孝)

博士(歯学)学位記授与

博士課程修了による学位記授与者

大貫 武司(口腔機能回復学)

「臼歯部人工歯排列による左右非対称性が発音に及ぼす影響」

荒木田 安弘(口腔機能回復学)

「精神的ストレス負荷による唾液中苦味関連タンパク質の変化」

大植 一樹(顎顔面口腔矯正学)

「Twin Block Applianceによる顎運動時の顎顔面軟組織の動態解析」

論文提出による学位記授与者

月田 秀夫(生体構造学)

「歯胚の発育における VEGF とその受容体の発現」

横手 優介(口腔病態解析制御学)

「炭酸ガスレーザーパルス波照射に対するラット口腔粘膜の組織反応」

三宅 弘直(成長発育歯学)

「プリアジャステッドアプライアンスによる抜歯治療が Class I crowding の歯列弓形態に与える影響」

藤原 治(歯科保存学)

「エンドモーターテクニカヴィジョンを用いた根管形成と根管充填の封鎖性に関する研究」

記念植樹

平成18年度卒業生による記念植樹が3月7日(水)に柔らかな日差しのもと、「躍進の像」西側にて行われました。大学生生活の様々な思い出とともに、歯学部・文学部卒業生の手によ

りケヤキが植樹されました。



謝 恩 会

平成18年度卒業生による謝恩会は、3月9日(金)に文学部が18時より市内ビューホテル・アネックスにて、また歯学部が19時よりホテルハマツにてそれぞれ開催された。

文学部は、最後の卒業生であることから、卒業生、出席者の思いも一入だったようである。両謝恩会共に、関係者も多数出席し、終始和やかな雰囲気で大盛況に繰り広げられる中、卒業生たちは、在学中の思い出を語り、過ぎし日々への名残を惜しみ、また将来への期待と抱負を新たにしていたようである。



共用試験歯学系 CBT、OSCE 特別実施

医療系大学間共用試験実施評価機構による平成18年度の奥羽大学歯学部第4学年を対象とした歯学系共用試験特別実施が行われ、滞りなく無事に終了することができました。

知識を評価する歯学系 CBT 〈Computer Based Training〉は2月27日(火)に、また、技能・態度を評価する歯学系 OSCE 〈Objective Structured Clinical Examination〉は3月11日(日)に、いずれも日本歯科大学生命歯学部を試験会場として実施され、第4学年103名全員が受験いたしました。

CBT 試験当日は共用試験実施評価機構の副理事長である福田康一郎先生(千葉大学医学部教授)が、また OSCE 試験当日は機構の副理事長である江藤一洋先生(東京医科歯科大学教授)と福田康一郎先生が視察にいられていました。

CBT・OSCE とともに学生は前日から東京に出向き、ホテルに宿泊して試験に臨みました。また、OSCE に関しては本学教職員107名が運営スタッフとして試験の運営にあたりました。

本学は医療系大学間共用試験実施評価機構に未だ入会していませんが、教育的配慮及び学生の救済といった見地から、今回の特別実施が実現いたしました。今回の特別実施を通じて学んだ点も多く、一方、反省点や改善点も多くあり、今後の学生教育に反映していかねばならないことを痛感しました。

(鎌田 政善)

共用試験歯学系 CBT、OSCE 受験者を引率して

CBT

2007年度共用試験歯学系 CBT 特別実施は、平成18年度奥羽大学歯学部4学年を対象に、平成19年2月27日(火)日本歯科大学生命歯学部100周年記念館コンピュータールームで実施されました。特別実施責任者には福田康一郎共用試験実施評価機構副理事長が、またモニター委員には荒木孝二東京医科歯科大学教授と小口春久日本歯科大学・東京短期大学教授

が担当されました。

受験生103名および引率者10名は、前日の2月26日(月)に都内のホテルに宿泊し、受験生は2月27日(火)9:30から17:50まで6ブロック320問の試験とアンケートを受けました。また、試験後には日本歯科大学の特別な計らいで、OSCE の会場の見学も行うことができました。

受験生は緊張していたものの、試験会場の提供と設定をされた日本歯科大学 CBT 運営者による試験場のこまめな換気などのご配慮により、病気等の不都合もなく全員無事受験を完了することができました。19年度における CBT は、奥羽大学5号館での実施実現を目指しております。(鈴木 陽典)



OSCE

奥羽大学歯学部4年生に対する「共用試験歯学系 OSCE 特別試験」が3月11日(日)、試験会場の日本歯科大学生命歯学部において実施されました。当日は4年生103名全員が受験し、無事試験が終了致しました。

「OSCE」は診療に参加する学生に必要な基本的診療技能・態度についてその客観的臨床能力を試験するもので、奥羽大学としては初めての「共用試験(特別実施)」として、2月27日(火)の CBT 試験に引き続いて行われました。なお今回の OSCE 実施にあたっては奥羽大学から100名を超える教職員が準備と当日の運営に参画致しました。

当日の「OSCE」は午前10時から試験が開始され、4年生を2グループに分けて全員が順次6つの課題の試験を行いました。学生は病院実習と同様の着衣(白衣・帽子、シューズ)にて受験し、緊張の中にも一生懸命試験に取り組む姿が見られ、全員が全ての課題を終了しました。(鈴木 康生)

第11回歯学部教員研修講習会

2月23日(金)、午後5時30分から第2講義棟で歯学部教員研修講習会が開催された。講師に東海大学理学部・安岡高志教授を迎え、「単位制度と教育の在り方ー達成目標のない教育改革はやめよー」という演題で講演を頂いた。

最初に、シラバスや学生による授業評価等、これまで行われてきた教育改革の問題点が指摘された。システムの導入が大切なのではなく、何をしたいのかといった達成目標がなければ、改革は意味をなさないことが説明された。授業評価の結果からは、話し方、板書の仕方、学生への接し方等について具体的な提言がなされた。

最後に、大学の魅力をつくるのは教職員であるが、それを強化するのは学生であり、両者が一体となった教育改革の必要性が示され、終了となった。奥羽大学における教育改革を検討していく上で、非常に有意義な講習会であった。

(鈴木 史彦)



安岡高志先生

第10回奥羽大学歯学部歯科医学 教育者ワークショップ

標記ワークショップが平成19年2月24日(土)奥羽大学5号館2階で開催された。本ワークショップは、各教員がテーマに基づいて問題点の集約、到達目標、解決策を立案する作業から、奥羽大学の教育現場に反映させる技法習得を実施目的としている。今回は、東海大

学理学部安岡高志教授をお招きし、「医療人に求められる教養の涵養」をテーマに26名の歯学部教員(教養系1名、基礎系15名、臨床系10名)が参加した。3グループに分かれ、KJ法・二次元展開法による作業と発表・討論が活発に行われた。グループ発表後、安岡教授から多くの的確な講評や示唆をいただいた。特に、全国の大学において各教員が教育に対して共通認識を得ることが現時点で浸透していない状況が挙げられ、奥羽大学で取組んでいる評価活動やワークショップの継続が価値あることを強調されていた。終わりに、天野歯学部長、浜田FD委員長より今後の課題を絡めた総評があり、閉会となった。

(福井 和徳)



薬学部公開セミナー

奥羽大学薬学部公開セミナーは、薬学部が福島県初として平成17年4月に発足して以来、薬学部教員の従来の教育・研究業績に基づき、その専門的知識を学内外に紹介し、併せて交流を深めることを目的として開始されました。

記念すべき第一回セミナーは、廣井邦雄教授の「有機硫黄化学と有機金属化学に基づく不斉合成」ならびに清水啓助手の「細胞内における酸化タンパク質分解酵素 Oxidized Protein Hydrolase (OPH) の機能と動態に関する研究」の2演題により、平成17年11月30日(水)に開催されました。その後、学外からの特別セミナーとして、平成18年6月には筑波大学大学院 幸田幸直教授による「薬学教

育6年制－実務実習現場の意見として－」、また、平成18年10月には大阪大学大学院薬学研究科 東純一教授による「ゲノム情報によるクスリの適正投与について」の演題にて講演をお願いすることができました。

現在、回も16回（平成19年3月現在）を重ね、活発な討論を重ねるなかで、教員相互の研究に対する理解を深めるという、当初の目的は達成されつつあります。今後、本セミナーがますます発展し、広く国内外に福島之地から情報を発信できるよう、願ってやみません。

（小池 勇一）

第2回大学院教員研修セミナー

平成19年3月15日(木)に平成18年度第2回大学院教員研修セミナーが附属病院棟5階臨床講義室で開催されました。今回は福島県ハイテクプラザ所長の宮野壯太郎先生を講師として、「福島県ハイテクプラザにおける研究機器とその応用」と題して講演頂きました。講演では、ハイテクプラザの概要、業務、研究開発事例、研究機器とその応用についてお話があり、多くの開発事業の実例の紹介や事業所・大学の研究者に対する研究支援の実例の紹介がありました。また、ハイテクプラザに備える機器類としての「各種分析機器、形態観察機器、構造解析・非破壊検査機器、X線CTスキャンシステム、物性試験機器、環境試験機器、形状測定機器、バイオ関連研究機器、食品関連研究機器等」の豊富な機器類の



宮野壯太郎先生

紹介とその研究応用について概要説明がありました。これまでも奥羽大学の教員がハイテクプラザを利用しており、今回の講演は、各講座における教員の研究活動を推進していく上での参考となり、活性化に繋がる契機となりました。当日は大学院教員だけでなく、各講座の教員や大学院生も含めて100名近い参加者が熱心に講演に耳を傾けました。

（鈴木 康生）

（歯）JICA 青年海外協力隊 研修生受け入れ

日本の最先端の歯科医療を勉強するために、2月1日(木)から23日(金)までの約3週間の予定でブータン王国から2名の女性、ケザン・デマさんとプブ・ワグモさんが来日しました。ブータン王国の歯科医療の発展に貢献している海外青年協力隊(JICA)の要請により、奥羽大学歯学部にて2人の研修が開始されました。

ブータン王国での歯科医療は歯科医師の数と施設が不足しており、これからの歯科医療の発展のために多くのパイオニアたちが諸外国の歯科治療技術の研修に励んでいます。その中でも日本の歯科治療の評価は高く、奥羽大学の研修でもインプラント治療をはじめ、各診療科の治療や施設設備、レーザー等の最先端歯科治療機器を見学、体験し多くの知識と技術を学んでいました。「奥羽大学の親切な先生達の御指導で、とても貴重な体験ができて嬉しく思います。ブータンに戻って、この体験を是非歯科治療の発展に生かしたいです」と2人は語り、帰国の路につきました。こうして奥羽大学がブータン王国と日本の親善の掛け橋になり、国際交流がなされた3週間でした。

（横瀬 敏志）



**国際歯科学研究学会 (IADR) ハットン賞
選考会出場と**

IADR / Unilever Travel Award 受賞

歯学部4年生 黒田 真美さん

国際歯科学研究学会 (IADR) は、毎年1回世界各地で開催される歯科医学に関する最も大きな権威ある国際学会です。この学会の学会賞にハットン賞があります。この賞は第10代会長のエドワード・ハットン博士を記念したもので、若手研究者や大学院生を表彰するものです。ハットン賞の選考会はIADR開催時におこなわれますが、これに出場するには世界各国でおこなわれる代表選考会でその国の代表に選出される必要があります。

日本代表選考会は、昨年8月に東京医科歯科大学で開催されました。英語による口頭発表と英語での質疑応答が審査員に採点され、高得点者が日本代表に選ばれます。審査の結果、歯学部4年生の黒田真美さんが口腔細菌のプロバイオティクスに関する研究で日本代表になりました。審査員の質問は核心を突いた厳しいものが多かったようです。これは、ハットン賞選考会で日本人受賞者を出したいという熱意の表れだと思います。日本人受賞者が少ない理由は、厳しい英語での討論についていけないためと考えられています。それに対応して日本代表の選考システムは、書類審査に加えて英語での口頭発表と質疑応答を評価する二段階審査になっています。このような厳しい審査をくぐった黒田さんの栄誉を心から称えたいと思います。

IADRでのハットン賞選考会は、3月20日(火)に米国ルイジアナ州ニューオーリンズ市内のヒルトンホテルで開催されました。当日は、世界各国から代表予選を勝ち抜いた45名が参加しました。黒田さんは初めての国際学会にもかかわらず堂々とした発表で、審査員の厳しい質問にも的確に対応して日本の代表に恥じない活躍でした。その結果、IADR / Unilever Travel Awardを受賞することができました。国際的に活躍できる歯科医師の育

成は、我が国の歯科医学教育の大きな目標の一つです。在学中にこのような国際的な舞台を経験したことは、黒田さんにとってかけがえの無い貴重な思い出になったことと思います。

(清浦 有祐)



黒田さん (左)



文学部卒業生へのお知らせ

平成19年3月31日(土)をもって文学部は廃止されましたが、今後、文学部の卒業生で就職試験、教員採用試験等のために証明書を必要とする方は、学事部教務課までご連絡下さい。

父 兄 会

歯学部・文学部・薬学部父兄会の幹事会、総会は3月9日(金)に開催され、平成19年度の役員ならびに事業計画・予算について承認されました。

主な内容については下記のとおりです。

歯学部

「平成19年度役員」

歯学部父兄会

会 長 枝松 満
副会長 渡辺 義宏
監査役 菅原 祝郎

「主な行事予定」

歯学部父兄会

定時総会 平成19年 4 月 4 日(水)
平成19年 5 月12日(土)
平成20年 3 月10日(月)
保護者懇談会 平成19年 5 月12日(土)
平成19年10月13日(土)

地域会（全体会・個別懇談会・懇親会）

19年 6 月 9 日(土)	大阪	大阪ガーデンパレス
19年 6 月23日(土)	仙台	江陽グランドホテル
19年 6 月30日(土)	東京	八重洲富士屋ホテル
19年 7 月 7 日(土)	福岡	福岡ガーデンパレス

「予 算」

(収入の部)

科 目	本年度予算額
前 年 度 繰 越 金	1,201,000
入 会 金	960,000
会 費	15,650,000
雑 収 入	1,000
合 計	17,812,000

(支出の部)

科 目	本年度予算額
通 信 費	220,000
印 刷 費	70,000
会 議 費	1,800,000
消 耗 品 費	8,000
旅 費 交 通 費	2,200,000
雑 費	100,000
地 域 会 開 催 費	4,610,000
課 外 活 動 援 助 費	5,820,000
学 生 福 利 厚 生 費	2,515,000
予 備 費	469,000
合 計	17,812,000

薬学部

「平成19年度役員」

薬学部父兄会

会 長 畑 伸一
副会長 吉川 真一
監査役 鈴木 洋子

「主な行事予定」

薬学部父兄会

定時総会 平成19年 4 月 4 日(水)
平成19年 5 月18日(金)
平成20年 3 月10日(月)

「予 算」

(収入の部)

科 目	本年度予算額
前 年 度 繰 越 金	9,081,840
入 会 金	1,100,000
会 費	11,200,000
雑 収 入	1,000
合 計	21,382,840

(支出の部)

項 目	本年度予算額
通 信 費	200,000
印 刷 費	200,000
会 議 費	1,000,000
消 耗 品 費	100,000
旅 費 交 通 費	550,000
雑 費	150,000
〈課外活動援助費〉	2,300,000
〈学生福利厚生費〉	7,350,000
予 備 費	9,532,840
合 計	21,382,840

附属病院

特別講演会（兼研修セミナー）の開催

去る2月22日(木)午後5時30分より奥羽大学附属病院棟5階臨床講義室にて特別講演会(兼研修セミナー)が開催されました。今回は、奥羽大学歯学部3期卒・広島市橋本歯科クリニック医院長の橋本正毅先生と奥羽大学歯学部17期卒・広島大学病院口腔維持修復歯科義歯・インプラント診療室の山中威典先生を講師にお招きし、橋本先生が『歯科医療への道ー私の臨床・研究・教育ー』を、山中先生が広島大学での『研究紹介』をご講演頂きました。

本講演会は研修医のセミナーを兼ねており、橋本先生は、後輩である研修医に対して、自らの卒業後の進路決定に至る理由、広島大学（旧第1補綴学講座）およびその大学院時代での奥羽大学卒業生としてのパイオニア、また苦学生、さらに当時留学先を自ら見つけ出された等の苦労話、その後大変な激戦区での開業に至る理由を述べられた。その経緯は「理念なくして目的の達成はならず」の精神を、開業後は患者さんのみならず全ての方への「感謝の気持ち」の尊さであることを示されました。

山中先生は広島大学での多くの研究成果を提示される中、「インプラント周囲組織の再生」、「顎位と嚥下機能」、「咬合と唾液」など超高齢化社会で今後歯科医療が進むべき一路を提示され、聴講者である研修医の目が生き生きとする中、閉演となりました。

(杉田 俊博)



平成18年度歯科医師臨床研修 第2回 OSCE 実施

本年度の臨床研修歯科医師61名に対する第2回の OSCE が、平成19年3月17日(土)に総合歯科第一診療室を会場に実施されました。平成18年7月に実施された第1回 OSCE は、本格的な臨床研修を控えての形成的評価を目的としていましたが、今回は1年間の臨床研修に対する総括的評価の一部であり、3系列3ステーションの試験をショットガン方式にて行いました。そのためもあってか、受験者は真剣に各ステーションの試験に取り組んでいるのが伺われ、臨床研修の成果を存分に発揮していました。スタッフは天野義和歯学部長、清野和夫病院長を始めとする臨床系教職員と病院職員で構成され、会場設営には管理課の皆さんにもご協力いただきました。

今回のスタッフの多くは1週間前に日本歯科大学にて行われた4学年学生に対する OSCE 特別実施を経験しており、OSCE に対する考え方の統一やスキルの向上がなされていたことから、事前の準備や打ち合わせの時間が限られていたにもかかわらず、スムーズに完成度の高い OSCE が実施できたと考えられました。また OSCE 実施に向けて唯一の不安要素であったインフルエンザによるスタッフの欠員に対して、残ったスタッフが気力と体力でカバーしていたのが印象的でした。

(山森 徹雄)



平成18年度歯科医師臨床研修修了式

平成18年度歯科医師臨床研修修了式が、3月28日(水)に附属病院5階の臨床講義室で挙行された。

はじめに、清野病院長より A プログラム(複合型) 臨床研修歯科医24名および B プログラム(単独型) 臨床研修歯科医37名全員に修了書が授与された。

続いて清野病院長から、奥羽大学附属病院での研修に誇りを持ち、さらに習得した1年間の研修成果をもとに更なる精進と、歯科医師としての人間性の向上を期待する旨の訓示が述べられ、さらに今回の修了証が歯科医師免許証と同等の価値があるので大切に保管するようにとの注意が述べられ閉式となった。

平成18年度から卒後臨床研修が必修となり、奥羽大学附属病院における研修プログラムを修了した第一期61名が、21世紀の歯科医療を担う立派な歯科医師として、さらに国民に望まれる歯科医師として大いに研鑽を積み、各地域で活躍されることを願っている。

(鎌田 政善)

附属病院研修セミナー

昨年度に引き続き、平成18年度も附属病院研修セミナーが毎週木曜日17時あるいは17時半から1時間～1時間半、計36回開催されました。臨床研修歯科医を対象とした奥羽大学教員による講演のほか、診療録整備委員会、医療安全推進委員会、院内感染予防対策委員会、福島県歯科医師会の今村俊彦先生、奥羽大学3期卒の高木幸人先生、同じく橋本正毅先生による特別講演会、研修歯科医による症例報告会も行われました。非常に充実し、意義深い一年間でした。

(田代 俊男)

私が薦める一冊の本

『鈍感力』

The Power of Insensitivity

(渡辺 淳一著、集英社)

女房が最近買ってきたこの本が自宅のテーブルに何気なく置いてあり、目に止まりました。タイトルを見ると『鈍感力』とあり、ニュース番組で、かの小泉前首相が安倍首相に対する叱咤激励に用いた言葉が「鈍感力」であったことを思いだし、興味を持ちました。著者の渡辺淳一氏は札幌医科大学整形外科の出身であったことと、同じ医療人として同郷の者として私の青春時代から慣れ親しんだ作家でした。流行語になる気配のあるこの「鈍感力」、多々共感しましたので以下に紹介します。

それぞれの世界で、それなりの成功をおさめた人々は才能はもちろんその底に必ずいい意味での鈍感力を秘めているものです。鈍感、それはまさしく本来の才能を大きく育み花咲かせる、最大の力です。

健康であるために最も大切なことはいつも全身の血がさらさらと流れることです。そのためには、あまりくよくよせず、他人に嫌なことを言われてもすぐ忘れる。このいい意味での鈍さが血の流れをスムーズに保つ要因になるのです。

よく眠り、すっきりと起きられる。この睡眠力こそ、人間の基本的な能力そのものです。睡眠力なくして人間が健康であり、人を愛し、仕事に専念することはできません。

才能のある人のまわりには必ず褒める人がいて、次にその本人が、その褒め言葉に簡単にのる。この「図にのる、調子のよさ」はいわゆる、はしたないことではなく、その人を大きく未来に向かって羽ばたかせる原動力となるのです。

環境衛生にあまり神経質になるよりは、抵抗力をもった強くて鈍い体ほど素敵なのはありません。

様々な不快感をのみ込み、無視して明るく

おおらかに生きる。そんな鈍感力を身につけた人が集団の中で勝ち残るということです。

いかがですか？思いあたる節はありませんか。皆さんの今後の人生に影響を与えてくれる何かが見つかるかもしれません。

(清野 晃孝)

余 滴

世間では今、TVの影響もあってか「オーラ」がひそかなブームを呼んでいる。自分自身も、養護教諭でありカラーセラピストでもあるかたに観て頂いたことがあった。また先日、コンビニで買った清涼飲料水にはカラーセラピーの説明のおまけが付いていた。

そもそも「オーラ」とはインターネット等で検索すると、生命体や物体がまとっている光。生命が持つ生体エネルギーが放出されているものといわれる。東洋で言う「気」と同じとされる場合もある。

肉眼では特殊能力を持った人しか目にするのができないが、オーラ写真によって撮影できるとされる。霊気・霊光とも言われる。人がまとうオーラは、その人の性格や体調、精神状態を示すと言われ、そのオーラ色には基本的に「赤・橙・黄・緑・青・藍・紫・白」の8色があり、それぞれ異なる性質を表すとのことである。

転じて、カリスマ性のある人物が醸し出す雰囲気や威圧感を「オーラ」と呼び、そういう人物を「オーラを纏っている」「オーラが出ている、出している」と表現することもある。

現在、私は薬学部の講義において「自己表現論」を担当している関係から、アサーショントレーニングを学生に実施している。人は典型的に「攻撃型」「非主張（受け身）型」「アサーティブ」の3型に大別される。その中でも「アサーティブ」すなわち、自分の意見もきちんと主張し、相手の主張も聞き入れて、そして他者を傷つけない、そういった自己表現の「オーラ」を纏った教員になれるよう常に心がけていきたいと考えている。

(車田 文雄)

同 窓 会

歯学部

同窓会の先生方に於かれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

今回は秋田県支部のご紹介をさせていただきます。

現在、古田大支部長（5期生）を筆頭に53名。岩手医大、日歯新潟、日大松戸、東京歯科に次ぐ大所帯となりました。県歯科医師会理事、県歯科医師連盟副理事長、県歯科医師会の各種委員会にも数多くの委員長、委員が抜擢され県歯でも一目置かれる様な立場になって来ました。秋田県警察・警察歯科医として16所轄警察署19部所中5名の人数を出し、身元不明者事例の身元確認は全国トップクラスで、社会的貢献も可成りのものです。

社保改正時、社保審査委員1名国保審査委員1名が在籍して居ますので、ほぼ全員が出席するほど充実した社保講習会が催されます。また、この1、2年は他大学歯学部同窓会とも活発的に交流を深め、色々な活動をする際には協力し合える体制も作られて来ました。

さて、我が秋田県支部は、極めて気さくで思いやりのあるアットホームな集団であることが本支部開設当時の最大の宝物です。各自奢ること無く先輩後輩に接し、専門分野のことや相談ごとがあれば、上下関係無く適任者が相談に乗ります。歴代、執行部の随所に若い先生を理事に起用することにより上下の隔たりを無くして来た環境作りが功を奏して居るのかもしれません。皆、支部と云う家族のために一生懸命頑張ってくれます。特に庶務理事は、最敬礼もので会務のほとんどを黙々とやっています。歴代支部長は顧問や監事に就いてもらい、理事会の際は相談役として執行部を助けてくれることになっておりますが、口数は少ないですね。会員各自微力ながら支部に携わり、暖かい言葉が自然と出て来る秋田県支部です。

(秋田県支部副支部長 高橋 克暢)

同窓生のひろば



高井 晃

(歯学部21期生)

奥羽大学を卒業し、はや9年が経ち、こんな私でも人並みに結婚し、娘も授かりました。娘は現在4歳、近所の幼稚園の年中です。

休診日は毎週木曜日と日曜日、休みの日は特に何をしているわけではありませんが、特に訴えたいことも主張したいこともありませんので、私の休日の過ごし方でもお話します。

日曜日は主に家族と過ごすようにしています。実際は単独行動と家族サービス半々くらいの割合？そのかわりに、木曜日は自分の好きなように過ごしています。晴れた日の木曜日のほとんどは、仲間を誘ってあることに時間を費やしています。それはバイクで林道を走ることです。林道といっても色々ありますが、農林水産省の管轄する国有林の中の林道です。平日にもかかわらず、大体4～5人のバイク仲間が集います。

一緒に走る人たちは酒屋さん、おすし屋さん、新聞屋さんと業種は様々です。近所で年齢も近く、皆さん家庭を持つパパさんライダーなので、各々のスキルにあった安全なライディングを心がけています。

実は、某有名ソーシャルネットワークシステム上で木曜日に走ることでできるライダーのコミュニティを立ち上げたところ、意外にも近所で年齢の近い人々が集まってくれました。現在、参加者は20名を超え、かなりの大所帯になり、皆さんそれぞれ職場や家族とは無縁の「ネット環境のある、バイクが好き」というただ1つの共通点だけで集まっています。

皆さん、同業者と酒を呑み、同じような話しの無限ループの中に身を置くより、共通の趣味と価値を持つ仲間と、見知らぬ土地で旨いものを食べる方がはるかにリフレッシュで

きると、私同様に考えているようです。

仲間とのツーリングの醍醐味は肌で風を感じる楽しさ、そして、一歩間違うと大けがにつながるという危機感。ツーリングでは、仲間達とその2つを共有しながら走るため、走りながら無言の会話をしている様なもので、自然と一体感が生まれ、助け合う、相手を思いやる良い仲間関係が築けるところだと感じています。



安藤 享

(英文科7期生)

Good morning everyone!

のあいさつで私の授業は始まります。

大学を卒業して早いもので8年が過ぎようとしていますが、私は現在講師という立場で中学校に勤務し、英語を教えています。講師は1年間という任用期間で採用されるため、とても不安定な立場です。

しかし、昨年は学級担任ということもあったので、自分の目の前にいる生徒たちに「この子たちに自分は何をしてあげられるだろう？」と模索する毎日でした。講師はあまり担任を持たせられることはないのですが、これまでに2回それぞれ別な学校で1年生を担当しました。それまでは副担任が多かったのですが、やはり教師の醍醐味は担任だと思います。授業以外の学級に関する雑務も多く、一番忙しいのですが、生徒たちと一番近いところで接することができます。特に文化祭等の学校行事は学級担任の腕の見せどころではないかと思います。自分自身、趣味で音楽をしていることから、合唱コンクールは生徒に負けないくらい本気で取り組んでしまいます。その中に数々のドラマがあり、成長していく生徒たちを間近で見ることができるのも教師という仕事にたずさわっているからだと思います。こういう瞬間がやはり教師を志して良

かったと思えるときでもあります。一番多感な中学生に関わっていくのは一筋縄ではいかないときもありますが、そういう時こそ自分自身にプラスになると信じて毎日頑張っています。

今年もまた採用試験があります。仕事をしながらの試験勉強はなかなか思うようにはいきませんが、これから出会うであろうまだ見ぬ生徒たちのために、この夏の採用試験突破をめざして頑張っていきたいと思います。

—須賀川市立稲田中学校勤務—

退職によせて



日本語日本文学科

太田 彌一郎

この2月で文学部開設以来18年間に亘って奉職して来た奥羽大学を停年退職いたしました。この間、曲りなりにも何とか職責を果たして来られたのは、ひとえに既に退職、転出された方をも含めた様々な方々の御指導、御鞭撻の賜物と感謝申し上げる次第です。

私にとってこの18年間は数年ごとに3期に分けられるように思います。最初の数年間は漢文サマー・セミナー、中国研修（言語文化実地調査）、卒論指導と段々に忙しくなっては行きましたが、私に限らず、文学部全体が草創の息吹きに満ちていた時期でした。

次の数年間は臨時定員増により文学部棟は一時、1,700名を超える学生で、文字どおり溢れ返っておりました。それにつれ、教える側も繁忙を極めました。こうしたなかで卒論提出を目前にした一学生の死がありました。当時、日文科の学科長であった私は卒論担当の教員と一緒に1月下旬、厳寒の岩手県北の葬儀に出向いた時の悲痛な気持ちは今も忘れえません。

最後の数年間は志願者の急減に続き、学生募集停止と文学部廃止の方向が決った時期です。志願者が多い時に将来に向けた有効な対応ができず、学部廃止という結末を招いたことに対し、当初から文学部に在職した者の一人として特に責任を痛感しております。何よりも4,000名を超える多くの卒業生諸君に対して申し訳ない気持ちで一杯です。しかし学部はなくなっても、諸君が奥羽大学文学部で学び、そして巣立って行った事実は消え去るものではありません。どうかその成果を社会で活かして行ってください。お願いします。

社会も大学も絶えざる変化のなかにあります。この変化に対し、目先の事に拘ったり、現状に甘んずることなく、将来を見据えた



確な対応が益々求められる時代になって来ていることは間違いないでしょう。自省自戒の念を込めて敢えて書き添えました。奥羽大学のこれからの発展を祈ってやみません。さようなら。



英語英文学科

青木 義孝

平成11年4月から8年間、
英語英文学科の教員として

お世話さまになりました。奥羽大では、いろいろ工夫して授業を行うことの大切さを改めて教えられました。学生の側の学ぼうという意欲は無論欠かせない前提ですが、教える側の私としても、学生諸君の興味・関心を高めるために充分なことができたかと反省しています。一般的な説明だけでなく、個別的・具体的な事例を通して更に深く対象を理解してもらう作業が足りなかったのではと悔いが残ります。

それに、この5年間は、文学部長として学部の問題処理に忙しく、学生諸君と教室で共に学ぶ機会が少なかったことを相済まなく思っています。ただ、卒業の時などに何人かの学生から、あの講読の授業は面白かったなどと言われると、少しは役に立ったかと思ひ、ほっとしています。

私にはもう「この次」の授業はなく、やり直しがききません。だが、卒業生の皆さんはまだ若く、未来がある。皆さんが大学での学習を生かし、それぞれの分野で経験を積み必要な知識を身につけて、信頼される人物になってくださるよう願っています。

振り返ると、私自身は大学を卒業する時に自分の知識の不足を実感し、更に勉強したいという気持ちから教員の道を選びました。それから50年になりますが、残念ながら「少年老い易く、学成り難し」といったところです。退職後も人生を終えるまで、人間についていろいろと考えていきたいと思ひます。

最後になりましたが、大学の職員の皆さまには、日々のご支援ありがとうございました。大過なく役目が果たせたのも皆様のおかげと感謝しています。大学の弥栄と卒業生ならびに職員の皆さまのご多幸を祈念しつつ、お別れといたします。





英語英文学科

石川 勝久

平成11年4月奥羽大学文学部に着任してから8年が過ぎ、この度文学部廃止に伴い退職することになりました。長いようで短い8年間いろいろお世話になり、心からお礼申し上げます。文学部がなくなることは残念ですが、文学自体は永久不滅のものと信じていますので、学生と教員の皆様のさらなる奮起と研鑽を念願しております。

私が赴任して驚いたことは、右も左もわからない自分が英語英文学科長に任命されたことです。実利を追う時代の要請と経済不況の影響が大きいとは感じましたが、文学部志願者数の減少に対抗するため、カリキュラム改正や教育法の工夫などスタッフ全員で努力を重ねました。意志の疎通手段が言語ですから、この鍛錬と応用に最初の段階から特段の配慮がもっとあればよかったように思いました。しかしいろいろ至らなかった点は率直にお詫びしたいと思います。

研究面では、大英図書館に3回資料収集に出かけ、それによって英国炭鉱業とロレンス文学の関係がかなり解明できたことが印象に残っています。世界の諸事情に精通している作家であるから一層、現実世界に本質的かつ根本的な批判を加えざるをえなかったように思われました。

4月からは愛知県の自宅に戻っております。県内の大学で英語を教えながら、ロレンス関係の論文をまとめた本の出版準備をしたいと思います。数年かかるように感じていますが、頑張りしたいと思います。最後になりましたが遠く愛知の地から、奥羽大学のますますのご発展を衷心よりお祈りします。



英語英文学科

南 鉄男

平成5年4月から今日まで14年間、奥羽大学教員として過ごすことができた。研究室の私物を整理していると、その間の出来事が様々に思い出される。

就任当初の印象として、頂上が白く覆われた福島山々が新鮮に感じられた。大都会に比べ、天空が高く、大地が鼓動していた。希望、不安、勇気が混じり合っていた。

異文化理解教育の一環として、州立ワシントン大学夏季海外語学研修に学生を引率した。この研修は 'Ichiro' 選手が大リーグで活躍する以前に始まった。参加学生の真面目な態度は現地で ESL (English As a Second Language) 教員から "Good students!" とほめられた。その際訪れた、時の流れを超越するレニア山の白い雄姿は富士山の優美さとは異なる印象であった。

この大学で、多士と出会うことができた。個性、信念、寛容の人々で、話すたびにその奥深さが伝わってきた。私にはまぶしいくらいに輝いていた。それは大海に浮かぶ自己の姿を知る得難い機会であった。

田中菊雄著『英語研究者のために』に触発され、英文学を志し、ここ奥羽大学で英文学の花園の扉を開くことができたのは幸せであった。今後、これまで以上の環境を望むことはできないが、新しい世界で、一歩でも前に進む気持ちを持ち続けたい。

長い間お世話になりました。ご発展を祈ります。



英語英文学科

早坂 高則

平成19年3月31日をもって契約期間満了により退職することになりました。「……文学部の今後のますますの発展を」という祈念のことばを最後に残したかったのですが、時を同じくして文学部廃止ということになっており、まことに残念でなりません。しかし、これも時代の流れなど如何ともしがたい事情によるものと観念しなければならないでしょう。

私は去る2000年4月、それまで勤めていた国立大学を定年退職後、ご縁があってこちらに参ることになりました。初めての私学ということで、それまでとの環境の違いなど当初は多少とまどうところもありましたが、親しみやすい同僚の先生方、親切なる事務職員の皆さま、そしておらかな学生諸君に囲まれて、まもなく落ち着きを取り戻し、私なりに学生指導をはじめ諸事に力を尽くすことができました。もちろん、いたらない点も多々あったかと思われませんが、ご容赦いただければ幸いです。

専門が英語学ということで、英語学関係の諸科目を中心に、一般英語の授業も担当させていただきましたが、一部でこれまでとは多少違った教授法（たとえばパワーポイントを使った映像や音声の提示）などを試みさせていただきました、大いに私自身の勉強にもなりました。授業以外では、奥羽大学独自のユニークなスタイルの公開講座、公開授業なども担当させていただいたことが強く印象に残っております。

これまでの満7年間、無事に勤めさせていただいたのはひとえに奥羽大学の皆さまのおかげと、深く感謝申し上げます。なお、次年度はある私学の非常勤として再び教壇に立つことになっておりますので、今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。奥羽大学のますますの発展と皆さまの御健勝を祈念して退職によせてのひとことといたします。



フランス語フランス文学科

藤井 史郎

平成9年4月1日、奥羽大学文学部フランス語フランス文学科に助教授として採用していただき、平成11年4月に教授昇任と同時に学科長を拝命し平成19年3月12日付けをもって退職するまでまる10年間、奥羽大学文学部にお世話になりました。過ぎてみるとあつというまの10年でした。奥羽大学関係者すべての方々のお世話になり、ご支援をいただいて何とか10年間やっていくことができました。まず奥羽大学の関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

学科長としての重責を十分に果たせたかどうかについては、はなはだこころもとない気持ちで一杯であります。ただこの10年間、学生と共に過ごした時間が最も長かったことだけは確かです。授業はもちろんですが、ニューカレドニアでのフランス語海外研修の引率を6回担当、学友会のメンバーと毎年一緒に過ごした球技大会、大学祭、仏検の個人指導、卒業生の結婚式に呼ばれ、同席した社会で活躍している他の卒業生との語らい、このようにこの10年は、学生、卒業生と過ごした濃密な時間であり、私にとって最も充実したものでした。奥羽大学赴任以前の東京での非常勤講師生活では、学生との密な関係を築くことは難しいことでした。東京中を駆け回っていたので、いつかは交通機関を使わない職場で仕事をしたいと願っていました。奥羽大学に運よく採用され、自転車で7分ほど、徒歩でも20分ほどのところに居住したことでその願いが実現しました。そうでなければ学生との密な付き合いはできなかったことでしょう。楽しい10年間を過ごさせていただきました。最後に、奥羽大学関係者の皆様のご健康とますますのご繁栄をお祈りいたします。



フランス語フランス文学科
榊原 直文

平成元年より、18年の長きに亘って、フランス語ならびにフランス文学を専門科目として学生に教えるという幸運を授かりました。

順境に恵まれ、教育と研究に勤しむことができた前半の9年間、そして、一転して、己の力不足を様々な意味で痛感させられた後半の9年間と、鮮やかなまでに二分される歳月でしたが、私を鍛えてくれたのは、皮肉にも、平成10年以降の思い煩う日々であったようです。

たとえば、卒業生たちとの交誼を通して、悦ばしい生き甲斐を実感することができたのでした。あるいは、事務職員の方々と出掛けた諸方の高校訪問は、独り本を読むばかりでは身につかない、幅広い人間性を培う得難い機会となりました。

このように、自分なりの充実した18年間で過ごすことができたのも、ひとえに、奥羽大学をめぐる皆様の様々なお力添えのお蔭なのです。衷心より感謝申し上げますとともに、そうした掛替えのない奥羽大学が、これからも力強く存続することを祈念してやみません。

さて、文学部は現実の姿としては消えますが、卒業生の皆さんの胸中深くに秘められてあることを忘れないでほしいのです。言い換えれば、文学部にも未来はあり、そして皆さん一人ひとりがその未来をこれからも切り拓いてゆくのだということです。皆さんの自覚と今後の活躍を願って、退職によせる言葉とさせていただきます。



日本語日本文学科
加藤 幸一

3月9日、文学部に在籍する45名全員が卒業証書並びに学位記を手にした。まことにさびしい人数であるが、全員が無事に卒業要件単位を修得してくれたことは喜ばしいことである。学生諸君の努力もさることながら、ご父兄の方々、関係各位のご理解とご協力の賜物である。ここに、文学部は18年の歴史に幕を下ろすこととなった。

思い返せば、平成元年の文学部開設の年から奥羽大学にお世話になり、文学部の歴史をすべて目の当たりにしてきた。教室から学生があふれている時代もあった。50名を超える学生とともに中国へ研修に出かけたこともあった。文学部を卒業した学生は、4,109名にのぼるという。中には、文学部で学んだ事を直接生かして教壇に立って活躍している者もいるが、文学部の教育とは関係のない世界で活躍している者もいる。むしろ後者のほうが多いであろう。もとより文学部の教育の成果は形になって表れることが少なく、人の心の内側に変化をもたらすものである。

卒業していった学生たちの内側にどれだけの変化をもたらすことができたのか、反省すべきことが多いけれども、それぞれの世界で自分の内側にある力を出し切って活躍してくれることを切に祈りたい。

18年の間、文学部において多くの貴重な経験を重ねることができた。とくに平成10年から8年にわたり日本語日本文学科学科長、最後の1年は文学部学生部長を務めさせていただき、様々な場面で多くの方々よりご教示をいただいた。心より感謝の意を表わし、退職の辞としたい。



日本語日本文学科
小野 四平

はじめて奥羽大学の門をくぐった日のことが忘れられない。あの日から数えて、ちょうど8年の歳月を過ごした。それは、文字通りアッと思うしかない時の流れだった。いろんな思い出が去来する。だが、ここには一つのことだけを書いておく。

大学での毎日は、私にとって、ここで働く人々による温かい友情との出会いだった。門をくぐるとき。事務部での用事するとき。図書館での仕事するとき。そして、さまざまな用務にたずさわる人々との出会いのとき。僅かな言葉では表現できない温情にふれて、その都度、私はこの大学で働ける幸せを感じたのだった。

もちろん、教員との出会い、学生との出会いなどでも、いろいろなことがあった。が、いまは、そこに立ち入らない。国立大学での生活しか知らなかった私にとって、私立大学は未知の世界だった。この世界は、実に多くの人々による素晴らしい温情によって支えられているのだということに初めて気付くことができたのである。8年を過ごして、いま、この大学を去るにあたって、このような人々との別離は、やはり限りなく寂しい。

前任校の大学では、本来の研究と教育の仕事よりも、果てしなく繰り返される「不毛の会議・かいぎ・・・」のなかで、へとへとに疲れた日々を過ごしてきたのだった。だが、奥羽大学では、ほとんどの時間を教育と研究に費やすことができた。これは、ほんとうに有り難いことだった。退職後には、ここで手掛けた研究の仕事のまとめに集中していくことにしたい。それを通して、ここで頂戴した「温情」に少しでも応えたいものだと考えている。



日本語日本文学科
田村 嘉勝

脳裡を去来するもの

奥羽大学に9年間お世話になりました。莊司学長から電話で直接「骨を埋める覚悟できて欲しい」といわれ、単身で神奈川から参りました。

9年の間には多くの紆余曲折がありました。着任早々、入試業務に配属されました。以前の経験をいかすようにとのことでした。なるほど、入試委員会、入試実務委員会に入っすぐに「違うな」との感想をいただきました。以後、入試科目の検討、出題範囲の検討、入試期日の検討、調査書の見方、高校カリキュラムの調査、高校訪問の仕方等、かなりの分量がありました。世間では、すでに国際化がすたれ、国際関係及び外国語系学部学科の不人気ははじまりました。同時に、「英語英文学科」たるものの内容の不明確さが露呈しはじめました。「国文学科」ならわかる、しかし「日本語日本文学科」だと、いまひとつ中身がわからないというのであります。

受験生の集まりには日本の社会の流れとのかかわりがあります。平成になってからだけでも、「看護学科」に先ずは人気が集まり、以後、「福祉」、「心理」、「薬学」、そして現在は「理学療法・放射線等の医療系学科」および「小学校教員」に人気が集中しています。かつて、学部見直しが奥羽大学でも話題になりました。その時、ある教員が「子ども学科」を提唱されました。私は賛意を示し、あわせて「小学校教員免許」取得を提案しました。今日の状況がある程度見えていたからであります。しかし、猛反対にあい、それは「ミニ総合大学」をつくることになり、莫大な経費を要するといわれました。が、反対理由にそれほどの根拠はありませんでした。

先日、薬学部部の逼迫さをうかがいました。薬学部が全国的にこれほどまでに林立するとは。しかし、地域格差をともなつて社会は動いています。今春、薬学部発足がある一方、

周知のとおり老舗薬科大学が有名私大との合併を打ちだしたのです。首都圏との格差是正のためには、地方に住む人のさらなる覚醒が要求されてきます。

9年間ではありましたが、いい勉強をさせていただきました。奥羽大学が、より以上に地域のために貢献し、より以上に地域から信頼されるよう祈念いたします。ありがとうございました。



共通学科

越中 優

このたび文学部廃止を機
に3月31日をもって退職す

ることになりました。

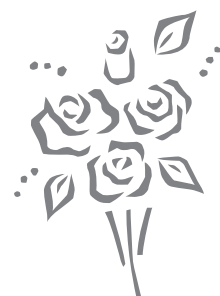
思えば昭和49年4月に奥羽大学の前身である東北歯科大学に助手として勤務してから30有余年、大学名も奥羽大学と変わる中、歯科理工学、数学、統計学、情報処理学概論、情報検索実習、情報機器論、情報メディアの活用と担当した教科は多岐に亘り、本当に長い間お世話になりました。

そのような長き間、強く印象に残っているのはやはり助手時代の研究に明け暮れていた日々のことです。野口前歯科理工学教授のご指導の下、扱い方によって性質が大きく変わる歯科材料は実験のたびにまったく違ったデータになることがよく起こり、泣かされることもしばしばありました。胃に穴が開くようなことも4～5回はあったでしょうか。七転八倒の実験でも、それを繰り返すたびに材料の世界が違ったものに見えてくるのが楽しく、まるで自分がコロomboのような刑事になって謎解きをやっているような気がしたものでした。そのような苦しみの中から真実の女神が実体を持って見えたとき、その嬉しさは本当に例えようのないものがありました。

籍を文学部に変えてからは、学生と接触する機会が増え、特に日本語ワープロなどのパソコン検定試験を始めてからは研究室への学

生の出入りも多くなり、研究よりは教育に当たる時間が格段と増したものでした。中でも、まるでピアノを弾くようにキーボードを扱い、10分間で1500文字以上も打つ学生たちと知り合えたことは、人の才能のすばらしさと無限の可能性に、この歳になっても目をみはらされるものがありました。彼らとはこれからもお付き合いが続くと思います。

最後に、これまでの諸先生の皆様のご指導、ご鞭撻、ご協力に感謝申し上げますとともに、奥羽大学の益々の発展をご祈念申し上げ、退職の挨拶といたします。ありがとうございました。



人 事

<退職>

藤井 史郎	教 授	文 学 部	3月12日付
加藤 幸一	〃	〃	〃
榊原 直文	〃	〃	〃
石川 勝久	〃	〃	3月31日付
青木 義孝	〃	〃	〃
南 鉄男	〃	〃	〃
早坂 高則	〃	〃	〃
小野 四平	〃	〃	〃
田村 嘉勝	〃	〃	〃
越中 優	〃	〃	〃
武田 忠	〃	〃	〃
辻 康哲	助 教 授	〃	〃
江島 宏隆	〃	〃	〃
佐藤 富晴	講 師	〃	〃
梅村 幸生	助 教 授	歯 学 部	〃
宮尾 益佳	助 手	〃	〃
今村 恭也	〃	〃	〃
石橋 由臣	〃	〃	〃
白井やよい	〃	〃	〃
角谷 三郎	〃	〃	〃
山本 裕之	〃	〃	〃
岡田 仁美	〃	〃	〃
齋藤はるか	〃	〃	〃
山内恵理子	〃	〃	〃
柴 千裕	〃	〃	〃
関 康宏	〃	〃	〃
丹治 祥大	〃	〃	〃
林 昭宏	〃	〃	〃
近藤 麗	〃	〃	〃
関 宗浩	〃	〃	〃
田口 大	〃	〃	〃
善積 知之	課 長	企 画 広 報	〃
影山藤一郎	守 衛	総 務 部	〃
永井 智子	看 護 師	看 護 部	〃

慶 弔

<結 婚>

おめでとうございます。

○矢吹 直子 病院事務部 事務職員 2月17日

(旧姓 宗形)

○遠藤 千穂 看護部 歯科衛生士 3月6日

(旧姓 野川)

<訃 報>

慎んでお悔やみ申し上げます。

●総務部 山田 博

祖父 三瓶 大 殿 (87歳) 2月1日

●薬学部 山本 正雅

義母 萩原 久 殿 (78歳) 2月4日

●学事部 宇佐見 正

実父 宇佐見正男 殿 (84歳) 2月14日

●歯学部 伊藤 一三

実母 伊藤 立子 殿 (92歳) 3月23日



行事予定

平成19年

4月 April	5月 May	6月 June
2(月) 在学生ガイダンス ㊦登院式(5年) 3(火) 授業開始 4(水) 入学式 父兄会総会 保護者懇談会 5(木) 新入生オリエンテーション ㊦健康診断(1年) ㊦新入生基礎学力試験 6(金) ㊦学外研修(1年) ㊦健康診断(1年) 9(月) ㊦フレッシュマン キャンプ(1年) ㊦健康診断(2年) 10(火) ㊦健康診断(3年) 13(金) ㊦キャリアガイ ダンス(1年) 18(水) 学生支援機構奨学 金募集説明会	12(土) ㊦父兄会総会・保 護者懇談会 17(木) オープンキャンパス 18(金) ㊦父兄会総会 26(土) 学長杯球技大会	8(金) 合同慰霊式 9(土) ㊦地域会(大阪) 23(土) ㊦地域会(仙台) 30(土) ㊦地域会(東京)

<委員会からのお知らせ>

本学報は、同窓生と在学生の保護者あてに送付しております。転居・住居表示の変更の場合は下記までご連絡くださるようお願いいたします。その際、お手数でも宛名シールの番号をご記入いただければ幸いです。なお、皆様からのご意見・ご感想をお寄せ下さい。

連絡先／奥羽大学 総務部 広報担当

奥羽大学報112号(通算No237) 平成19年3月31日発行

発行 奥羽大学
学報編集委員会
委員長 清水秋雄

☎963-8611 福島県郡山市富田町字三角堂31番1
 電話 024(932)8931(代) FAX 024(933)7372
 ホームページアドレス <http://www.ohu-u.ac.jp>
 メールアドレス info@ohu-u.ac.jp

